

日本気象学会 2018 年度秋季大会

出展・リクルートブース開設・協賛企業・団体等一覧

今大会の開催にあたり、以下の企業・団体からご出展・リクルートブースご開設・ご協賛を頂きました（2018年8月21日現在；50音順）。厚く御礼申し上げます。

英弘精機株式会社

株式会社気象工学研究所+

気象情報通信株式会社+

サイバネットシステム株式会社*

三興通商株式会社*

東武タワースカイツリー株式会社*

株式会社日本エレクトリック・インスルメント

日本気象株式会社*+

一般財団法人日本気象協会*+

株式会社ニューテック*

株式会社日立パワーソリューションズ*

株式会社プリード

（五十音順）

*は会場内に併設されるブースにて展示を行う予定の企業・団体です。

+は会場内に併設されるリクルートブースを設ける予定の企業・団体です。

日本気象学会 2018 年度秋季大会

会期：2018 年 10 月 29 日（月）～11 月 1 日（木）

会場：仙台国際センター

〒980-0856

仙台市青葉区青葉山無番地 <http://www.aobayama.jp/>

大会実行委員会担当機関：東北大学，仙台管区気象台，日本気象協会東北支社，日本気象予報士会東北支部

大会委員長：大林 正典（気象庁 仙台管区気象台長）

当日の会場への連絡先：大会実行委員会事務局（小会議室 4）

TEL: 080-2560-1543（大会期間中のみ有効）

取次ぎ等はいたしませんのでご了承ください。

仙台国際センター代表 TEL: 022-265-2211

交通の案内：

仙台空港より

仙台空港アクセス鉄道，仙台駅まで 快速17分 普通25分

タクシー 約50分

仙台駅より

仙台市地下鉄東西線5分「国際センター駅」下車，徒歩1分

徒歩30分

タクシー約7分

会場案内図



大会行事予定

A会場 : 大会議室「橘」
 B会場 : 大会議室「萩」
 C会場 : 展示・レセプションホール「桜2」
 D会場 : 大会議室「白樫1」
 ポスター会場 : 展示・レセプションホール「桜1」

小倉特別講義 : 大会議室「橘」
 シンポジウム・授賞式会場 : 大ホール
 受付 : 大会議室「橘」の前
 大会事務局 : 小会議室4
 懇親会 : 展示・レセプションホール「桜1」

() 内は講演数と講演番号

		A会場	B会場	C会場	D会場
10月 29日 (月)	10:00～ 11:30	第一回小倉特別講義			
	13:00～ 17:00	小倉特別講義連携セッション 「メソ気象研究の現状と今後」	専門分科会 「YMC：海大陸域におけるマルチスケールな大気-海洋-陸面相互作用研究」 (19, B151～B169)	専門分科会 「短寿命気候汚染物質(SLCP)による気候変動および影響の評価」 (15, C151～C165)	大気放射 (7, D151～D157) 専門分科会 (14:30～) 「気象観測・予測情報の再生可能エネルギーなどの気象ビジネス・サービスへの利活用」 (11, D158～D168)
10月 30日 (火)	09:30～ 12:00	熱帯大気 (12, A201～A212)	気象予報・データ同化 I (12, B201～B212)	中層大気 (11, C201～C211)	大気境界層 (11, D201～D211)
	13:00～ 15:00	シンポジウム「未来を拓く気象観測のあり方」			
	15:15～ 15:45	堀内賞・正野賞・山本賞・奨励賞授与			
	15:45～ 17:45	堀内賞・正野賞・山本賞受賞記念講演			
	18:00～ 20:00	懇親会			
10月 31日 (水)	09:30～ 11:30	降水システム I (10, A301～A310)	気候システム I (10, B301～B310)	専門分科会 「雲微物理モデリングの現状と可能性」 (10, C301～C310)	中高緯度大気 (8, D301～D308)
	11:30～ 12:30	ポスター・セッション (108, P301～P3a8)			
	13:30～ 17:00	降水システム II (15, A351～A365)	気候システム II (17, B351～B367)	専門分科会 「理論・観測・数値シミュレーションによる惑星大気研究の最前線と将来展望」 (12, C351～C362)	専門分科会 「人工知能 (AI) は気象学にブレイクスルーをもたらすか？」 (15, D351～D365)
11月 1日 (木)	09:30～ 11:30	降水システム III (10, A401～A410)	気候システム III (10, B401～B410)	気象予報・データ同化 II (10, C401～C410)	大気力学 (7, D401～D407)
	11:30～ 12:30	ポスター・セッション (108, P401～P4a8)			
	13:30～ 17:00	専門分科会 「全球降水観測計画「GPM」主衛星による中高緯度降水観測の最前線」 (18, A451～A468)	物質循環システム (17, B451～B467)	観測手法 (14, C451～C464)	気象教育・環境気象 (4, D451～D454) 専門分科会 (14:30～) 「局地気象とくらし」 (7, A455～A461)

発表件数 : 508 件 (専門分科会 107, 一般口頭発表 185, ポスター216)

当大会予稿集に掲載された著作物については、以下の規程「日本気象学会の刊行物に掲載された著作物の利用について (http://www.metsoc.jp/teikan/MSJ_kitei_copyrightpolicy.pdf)」に準じます。

本プログラムの記載内容に関する問い合わせは、〒305-0052 茨城県つくば市長峰1-1気象研究所予報研究部内 講演企画委員会 (E-mail: kouenkikaku2018a@mri-jma.go.jp) まで

講演の方法

一般口頭発表・専門分科会

- ・ 一般口頭発表の講演 1 件あたりの持ち時間は 11 分 (講演 9 分・質疑 2 分) です。
- ・ 専門分科会の発表時間については世話人からの指示に従ってください。
- ・ 講演には PC プロジェクターを使用できます。
- ・ 講演にあたり、予め以下の点をご了承ください。
 - ✓ パソコンは各自で準備して下さい。会場にはプロジェクター、VGA ケーブルおよび HDMI-VGA 変換アダプタを準備します。VGA (ミニ D-sub15 ピン)、あるいは HDMI (フルサイズ) コネクタを装備した PC が使用できます。
 - ✓ セッション開始前の休憩時間などを利用して、必ず接続の確認を行っておいて下さい。また接続が不安な場合は、セッション開始前に会場係に申し出て下さい。
 - ✓ 突然の故障や接続の際のトラブルが発生した場合、座長の判断で発表順の繰り下げなどの対応をとること

があります。携帯用メディアによるバックアップファイルの準備など、トラブルへの備えは講演者自身で行って頂くようにお願いします。

ポスター発表

- ・ 講演者はポスターに表題と著者名を明記して下さい。
- ・ ポスター発表の一人当たり使用可能面積は、縦 180 cm × 横 120 cm 程度となっています (ただし、足元からパネルが立ち上がる点に注意)。
- ・ ポスターの掲示には画鋏のみが使用できます。画鋏は会場に用意されています。
- ・ ポスターの掲示可能時間は 9:30~13:00 です。会場の都合上時間厳守でお願いします。
 - ✓ 第 3 日の発表者は 10 月 31 日 09:30~13:00
 - ✓ 第 4 日の発表者は 11 月 1 日 09:30~13:00
- ・ ポスター会場での機器の使用は、講演申し込み時に申し出ていたもの以外は原則として認められません。

保育施設の紹介について

大会実行委員会では、大会期間中の保育施設の紹介と、施設利用費用の一部補助を行います。紹介する保育施設と補助金額は下記の通りです。

保育施設 「こぐま保育園」

住所 〒980-0023 宮城県仙台市青葉区北目町4番7号

HSGビル

TEL: 022-262-1808

<http://koguma-hoiku.info/>

地下鉄東西線「青葉通一番町駅」徒歩10分

補助金額

保育施設利用料の7割を補助しますが、1日あたり補助金額の上限は10,000円です。また、交通費についても、上限を1日700円として補助を行います。施設を利用される場合は、利用者が直接お申込みのうえ、10月19日(金)までに下記担当者までご連絡下さい。他の施設を利用される場合にも同様の方法で補助を行います。保育施設の利用を検討されている方は、お気軽に担当者にお問い合わせください。

連絡先 稲飯洋一 (東北大学)

E-mail: yoichi_inai@m.tohoku.ac.jp

TEL: 022-795-5794

大会実行委員会からのお知らせ

- ・ 本大会では前納受付者には、事前に郵送で大会参加票と大会案内冊子 (含・シンポジウム予稿集) が届きます。前納受付者は大会参加票を持参のうえ、そのまま会場へお越しください。前納受付者で大会参加票を破損・紛失した方および懇親会を当日新たに申し込まれる方、なら

びに当日受付者は、大会総合受付までお越しください。

- ・ 仙台国際センター館内は全館禁煙となっています。喫煙の際は、屋外に設置されている喫煙コーナーをご利用ください。

シンポジウム「未来を拓く気象観測のあり方」

日時: 2018年10月30日(火) (大会第2日) 13:00~15:00

会場: 仙台国際センター 大ホール (会議棟2階)

司会: 早坂 忠裕 (東北大学)

※シンポジウムの聴講は無料です。一般の方も参加できます。

趣旨

気象学は観測と理論、数値モデルが密接に関係して発展してきました。最近では計算機の進歩により、気候の将来予測や

日々の天気予報の技術が大きく進みつつあります。一方で、観測は気象学において必要不可欠であるにもかかわらず、その重要性が必ずしも十分評価されていません。気候の将来予測、天気予報、あるいは再解析の精度向上においても観測は極めて重要です。特に、最近では地球システムを統合的に理解することが重要になっています。観測の社会的意義、ビッグデータとしての活用方法など、より広い視点も含めて、気象観測のあり方を気象学会および関連分野の方々と一緒に考えてみたいと思います。

プログラム

- 「学術委員会における議論の紹介」
塩谷雅人（京都大学 生存圏研究所）
- 「地球衛星観測の現状と将来」
佐藤薫（東京大学 大学院理学系研究科）
- 「衛星データ同化／再解析」
岡本幸三（気象庁気象研究所）
- 「航空機や大気球による観測（温室効果ガスの事例から）」
青木周司（東北大学 大学院理学研究科）
- 「オープンサイエンス時代の観測データとその科学的・社会的役割」
村山泰啓（情報通信研究機構）

総合討論

第一回小倉特別講義

※聴講は無料です。一般の方も参加できます。

日時：2018年10月29日（月）（大会初日）10:00～11:30

会場：仙台国際センター 大会議室「橋」（大会A会場）

趣旨：「天気」2018年5月号でご案内した通り、小倉義光先生からのご寄付を基にして設立されました小倉義光・正子基金を活用する一環として、本秋季大会より「小倉特別講義」を開催いたします。これは、年ごとに設定された研究分野において、国際的に著名な研究者を招聘して広く学会員向けに講演を行っていただくものです。第一回として、小倉先生に縁の深いメソ気象学分野を選び、下記の通り実施いたします。学会に出席されない方でも参加可能です。

講師：Prof. Robert Fovell (Atmospheric & Environmental Sciences, University at Albany – SUNY)

講演題目：How Ice Crystals Steer Typhoons

備考：参加無料。講義は英語で行われます。同日午後には、関連する小倉特別講義連携セッション「メソ気象研究の現状と今後課題」も開催されますので、併せてご参加ください。

小倉特別講義連携セッション

メソ気象研究の現状と今後の課題

日時：2018年10月29日（月）（大会第1日）13:00～17:00

場所：A会場

使用言語：英語（質疑は日本語も可）

主催：公益社団法人日本気象学会、小倉レクチャー実行委員会

趣旨：近年、メソ気象学に関わる観測とモデリングは急速に発展してきました。我が国でもドップラーレーダー（フェーズドアレイも含む）と偏波レーダーにより常時、高時空間分解能の監視が行われるようになり、宇宙からはひまわり8号が驚異的解像度の画像を配信するようになりました。しかし、わが国には観測専用の航空機が未だ整備されていないという課題が残されています。一方、数値シミュレーションにおいては、超大型コンピュータの登場、数値モデルの高度化、JRA-55などの客観解析データの整備などにより、多様な現象の高精度シミュレーションが可能となりました。しかし、2017年に発生した九州北部豪雨のような局地的豪雨の予報はい

まだに困難で、メソ気象における予測の大きな課題となっています。本専門分科会では、第1回「小倉特別講義」に合わせて、メソ気象学における現状と課題を、この分野の専門家の方々に概観していただき、将来の課題を明らかにすることを目指します。

プログラム：

13:00-13:10 Introduction

Kazuhisa Tsuboki (Nagoya Univ.)

13:10-13:40 Tornadoes: Our current understanding and future subjects（竜巻の理解の現状と課題）

Hiroshi Niino (Univ. of Tokyo)

13:40-14:10 Big Data Assimilation: achievements and future directions（ビッグデータ同化：成果と今後の方向性）

Takemasa Miyoshi (Riken)

14:10-14:40 Development and future prospects of cloud physics linked to mesoscale meteorology in East Asia（東アジアにおける、メソスケール気象学と関連した雲物理の発展と将来展望）

Hiroshi Uyeda (Professor Emeritus, Nagoya Univ.)

14:40-15:00 Break

15:00-15:30 Toward a comprehensive understanding of diverse meso- α -scale cyclones (多様なメソ α スケール低気圧の包括的な理解に向けて)

Wataru Yanase (MRI, JMA)

15:30-16:00 Observation of mesoscale precipitation phenomena by radar from the space and the ground (宇宙・地上からのメソスケール降水現象の観測)

Nobuhiro Takahashi (Nagoya Univ.)

16:00-16:30 Quasi-stationary band-shaped precipitation

systems causing localized heavy rainfall (集中豪雨をもたらす線状降水帯)

Teruyuki Kato (JMA)

16:30-17:00 Typhoon observation with aircraft reconnaissance in the western North Pacific (台風の航空機観測)

Hiroyuki Yamada (University of the Ryukyus)

世話人: 坪木和久 (名大宇地研), 新野 宏 (東大大気海洋研), 吉崎正憲 (立正大)

専門分科会の概要紹介

YMC: 海大陸域におけるマルチスケールな大気-海洋-陸面相互作用研究

日時: 2018年10月29日(月) (大会第1日) 13:00~17:00
場所: B会場

趣旨: インド洋から太平洋にかけての暖水プール域に広がる「海大陸」の気象・気候システムの理解と予測技術の向上, さらには全球への影響の理解を目指す国際プロジェクト YMC (Years of the Maritime Continent) が2017年7月より2年間の予定で始まっている。この間, テーマごとに集中観測を複数実施する。最初の集中観測が2017年11月-2018年1月にインドネシア・スマトラ島西岸にて, 日変化降水やMJOなどを主対象として実施された。また, 2018年7-8月にはベトナム~フィリピン~パラオに至る海・陸域で夏季モンスーンに伴う降水現象や成層圏-対流圏相互作用などを対象にした集中観測も予定されている。本分科会では, これら集中観測の最新成果を中心として, 同域における様々な時空間スケールの大気-海洋-陸面相互作用に関する最新の研究成果を持ち寄り, 知見の共有を図る。

世話人: 米山邦夫 (海洋研究開発機構), 竹見哲也 (京都大学), 安永数明 (富山大学), 那須野智江 (海洋研究開発機構)

短寿命気候汚染物質 (SLCP) による気候変動および影響の評価

日時: 2018年10月29日(月) (大会第1日) 13:00~17:00
場所: C会場

趣旨: エアロゾルおよびオゾンやメタンなどの微量気体は, 大気汚染物質であるとともに, 気候変動を引き起こす物質として知られており, 短寿命気候汚染物質 (SLCP) とも呼ばれる。SLCP は大気上端での放射強制力が正の物質と定義されることもあるが, 本来は気候変動を引き起こす短寿命物質すべてを取り扱うべきである。微量気体は複雑な反応系, エアロゾルは「エアロゾル・放射相互作用」および「エアロゾル・雲相互作用」などの複雑なプロセスにより, それらの信頼度の高い定量的影響評価を行うことは困難な状況にある。この専門分科会では, SLCP

による気候変動の定量的評価に関して, 研究の現状を共有するとともに, SLCP による健康・農作物等への影響についても考慮しつつ, 今後取り組むべき課題について議論する。

世話人: 竹村俊彦 (九州大学応用力学研究所), 須藤健悟 (名古屋大学環境学研究科), 鈴木健太郎 (東京大学大気海洋研究所), 五藤大輔 (国立環境研究所), 増富祐司 (茨城大学農学部)

気象観測・予測情報の再生可能エネルギーなどの気象ビジネス・サービスへの利活用

日時: 2018年10月29日(月) (大会第1日) 14:30~17:00
場所: D会場

趣旨: 気象観測・予測情報は, 古くから水文・農業・雪氷分野において広く利用され, 防災等に活用されてきた。また, 保険・物流等の社会経済活動の中でも広く気象情報は利用されており, 近年は太陽光・風力発電といった再生可能エネルギー分野でもその利活用が期待されている。2017年に気象ビジネス推進コンソーシアムが立ち上がり, 今後も気象情報の需要は増加することが考えられるが, 多様な分野の研究者・民間企業等の技術者が広く議論する場は少ない。そこで本セッションは, 気象情報の活用のための基礎的な研究から活用事例の紹介まで, 再生可能エネルギーだけでなく分野を問わず幅広く講演者を募り, 気象情報の今後の利活用方法について様々な視点から議論することを目的とする。また, セッション終了後に意見交換を行うための場を設ける予定である。興味のある方にはこちらにも積極的に参加頂き, 活発な議論・交流の機会として利用して頂きたい。

世話人: 宇野史睦 (産業技術総合研究所), 大竹秀明 (産業技術総合研究所), 島田照久 (弘前大学), 野原大輔 (電力中央研究所), 吉田健二 (伊藤忠テクノソリューションズ株式会社), 宇田川佑介 (構造計画研究所/東京大学), 山口浩司 (日本気象協会), 中島孝 (東海大学)

雲微物理モデリングの現状と可能性

日時：2018年10月31日（水）（大会第3日）09:30～11:30

場所：C会場

趣旨：雲・降水粒子の生成・成長に関わる素過程は、水や熱の再分配を通して地球大気の循環に深く関与している。また、気候予測に不確実性を生み出す最大の要因とされる雲エアロゾル相互作用の解明という側面からも重要である。雲・降水粒子の粒径・形状・密度等の物理特性は、リモートセンシングによる地球環境監視のほか、気象災害リスク評価の観点からも重要な要素である。

雲・降水粒子に関わる素過程および粒子特性のモデリングは、オイラー法（ビン法・バルク法）やラグランジュ法による粒子成長方程式を基礎とする取り組みが、半世紀にわたってなされるとともに、それらを応用した研究が進められている。これら異なるモデリング手法に関して、それぞれの特徴や現時点での到達点を俯瞰し、今後のモデル間の連携、雲・降水粒子の直接・遠隔観測との連携の可能性について議論したい。

世話人：橋本明弘（気象研究所）、佐藤陽祐（名古屋大学）、端野典平（名古屋大学）、大西領（海洋研究開発機構）、島伸一郎（兵庫県立大学）

理論・観測・数値シミュレーションによる惑星大気研究の最前線と将来展望

日時：2018年10月31日（水）（大会第3日）13:30～17:00

場所：C会場

趣旨：20世紀後半から太陽系内惑星の大気に生じる諸現象に関する理論的、観測的、数値的な研究がなされてきた。近年においては、系外惑星の発見が相次いでおり、惑星大気科学の対象は広がりつつある。現在は、我が国が主導的に関わる太陽系内惑星の探査ミッションが進行中あるいは計画中であり、新たな宇宙望遠鏡を用いた系外惑星観測計画も諸外国において進められている。観測面の今後の進展と理論的研究・数値シミュレーションの発展、更にこれらの結合により惑星大気諸現象に関する理解が深まるものと期待される。この専門分科会では、観測、数値計算、理論のあらゆる面で惑星大気最新の研究成果の発表を募集する。惑星大気に関する理解の現状を概観し、将来の課題を展望する場としたい。

世話人：石渡正樹（北海道大学）、高木征弘（京都産業大学理学部）、佐藤光輝（北海道大学）、寺田直樹（東北大学）、高橋芳幸（神戸大学）

人工知能（AI）は気象学にブレイクスルーをもたらすか？

日時：2018年10月31日（水）（大会第3日）13:30～17:00

場所：D会場

趣旨：気象学では、これまでにデータ同化やガイダンス等において、ベイズ推定やニューラルネットワークといった機械学習手法が用いられてきた。一方で、近年急速に発展してきた機械学習の一手法である

ディープラーニング（深層学習）を初めとした人工知能（AI）技術は、様々な分野において活用され、成果を上げている。同時に、観測手法や計算機性能の向上によって、高品質かつ膨大な量の気象データの蓄積が進んでおり、AIの活用によって大きなブレイクスルーを生み出すポテンシャルを秘めていると言えよう。そこで本分科会では、古典的な機械学習手法から最新のディープラーニングまでに関連した研究事例を幅広く募集する。また、総合討論を通して、気象学におけるAIの新しい利活用方法や利活用に当たっての注意点等、将来展望について議論を行いたい。

世話人：松岡大祐（海洋研究開発機構）、筆保弘徳（横浜国立大学）、伊藤耕介（琉球大学）、中野満寿男（海洋研究開発機構）、楠研一（気象研究所）、大西領（海洋研究開発機構）

全球降水観測計画「GPM」主衛星による中高緯度降水観測の最前線

日時：2018年11月1日（木）（大会第4日）13:30～17:00

場所：A会場

趣旨：2014年2月末に打上げられた日米共同開発の全球降水観測計画「GPM」主衛星は、熱帯降雨観測衛星TRMMの観測範囲外であった中高緯度で、世界初の衛星降水レーダ観測データを蓄積し続けている。GPM主衛星搭載の二周波降水レーダDPRにより、二周波観測に基づく降水粒子情報の推定が可能となり、同じくGPM主衛星搭載のGPMマイクロ波放射計GMIとDPRの同時観測は、コンステレーション衛星（GCOM-W/AMSR2を含む）搭載のマイクロ波放射計からの降水推定を中高緯度も含めて高精度化する役割を果たす。本専門分科会では、固体降水や潜熱加熱のようなGPM主衛星による中高緯度降水観測の最先端成果を集め、気象研究への有効利用を促進する。CloudSat衛星やCALIPSO衛星、今後打上げ予定のEarthCARE衛星との複合利用、さらにはDPRやAMSR2の後継センサについて議論することも目的とする。

世話人：高藪縁（東京大学大気海洋研究所）、青梨和正（気象庁気象研究所）、高橋暢宏（名古屋大学）、重尚一（京都大学）、久保田拓志（宇宙航空研究開発機構）

局地気象とくらし

日時：2018年11月1日（木）（大会第4日）14:30～17:00

場所：D会場

趣旨：2017年の夏は8月を中心に東北地方太平洋側でやませが吹き、農作物への影響が心配された。やませは東北地方太平洋側に凶作をもたらす風であるが、奥羽山脈を越えて吹き下ろす秋田の一部地域ではこの風を「宝風」と呼び、豊作をもたらす風を意味する。多様な地勢を持った日本では、特徴的な地形がもたらす局地気象が昔から数多く知られ、私たちのくらしに影響を与えてきた。その一方で近年数値モ

デルの高精度化や観測技術の向上により、局地気象のメカニズムの理解が進んでいる。
本分科会では、私たちの暮らしに関わる全国の局地気象について、昨今の研究手法に基づいた発表を気象予報士、実務者、研究者等から幅広く募集したい。
具体的には、観測研究から数値モデルに至る様々な手法に基づいた気象学的研究はもとより、防災、食、農林水産、観光、都市気候など暮らしを組み合わせた調査研究を期待する。大学院生など若手の発表も歓迎する。

世話人： 鈴木健斗（日本気象予報士会）、鈴木和明（元福島地方気象台）、白川栄一（熊谷地方気象台）、杉山公利（日本気象予報士会）、山下堯也（日本気象予報士会）、大西晴夫（日本気象予報士会）、平松信昭（日本気象協会）、岩田修（日本気象予報士会）、岡田登志恵（日本気象予報士会）、荒川知子（田園調布学園中等部・高等部）

研究会のお知らせ

大会期間中とその前後に以下の研究会が予定されています。興味のある方はご自由にご参加下さい。

気象災害委員会・メソ気象研究会合同研究会

日時：2018年10月28日（日）大会前日 13:00~17:30

場所：仙台国際センター 大会議室「萩」（宮城県仙台市青葉区青葉山）

コンビナー： 中村 尚（異常気象分析検討会）、竹見哲也（気象災害委員会）、坪木和久（メソ気象研究会）

テーマ：「平成30年7月豪雨」に関する理解の現状と今後の課題

内容：気象庁が「平成30年7月豪雨」と命名した未曾有の豪雨災害が、2018年7月上旬の梅雨末期に発生した。3日以上に及ぶ大雨、最大1800mmの総降水量、九州から西日本、さらに岐阜県に至る広域で観測史上1位の降水量を観測するなど、これらの特徴はこれまでの豪雨とは性格を異にするきわめて特異なものであり、甚大な水害や土砂災害をもたらした。この豪雨については気象学的な意義だけでなく、大災害という観点から社会的に大きな問題となっており、気象学のコミュニティはこの現象についての社会に説明する責任を負っている。その説明のためには、気象学・気候学的に多様な角度からの調査・検討が必要である。その一環として開催する本研究会では、遠隔影響など大規模循環場、総観気象場、メソ降水系、水文学、地球温暖化との関係、さらに予報の現場からの知見を集め、その理解と説明を試みる。

プログラム：

- 13:00~13:10 趣旨説明 坪木和久（名古屋大学宇宙地球環境研究所）
- 13:10~13:40 「広域豪雨をもたらした大規模大気循環の特徴」中村 尚（東京大学先端科学技術研究センター）
- 13:40~14:10 「大雨をもたらした総観場における水蒸気輸送について」坪木和久（名古屋大学宇宙地球環境研究所）
- 14:10~14:40 「平成30年7月豪雨のメソスケール大気環境場と降水系の発達」竹見哲也（京都大学防災研究所）
- 14:40~15:00 休憩
- 15:00~15:30 「気象レーダー等から読みとれる平成30年7月豪雨の特徴とその将来頻度変化の解析」中北英一・山口弘誠・小坂田ゆかり（京都大学防災研究所）
- 15:30~16:00 「平成30年7月豪雨に際して予報の現場が考

えたこと、行動したこと」（仮題）気象庁担当官

16:00~16:30 「地球温暖化は平成30年7月の豪雨・猛暑にどう影響したか」渡部雅浩（東京大学大気海洋研究所）

16:30~17:00 「2018年7月豪雨の降水特性と後方の上層トラフの効果について」高薮 縁（東京大学大気海洋研究所）

17:00~17:30 総合討論

※発表タイトルは、予告なく変更する場合があります。

また、講演時間は若干前後することがあります。

世話人：中村 尚（東大）、竹見哲也（京大）、坪木和久（名大宇地研）、加藤輝之（気象庁）、小倉義光（東大大気海洋研）

連絡先：坪木和久（名大宇地研）

E-mail：tsuboki@nagoya-u.jp

※本研究会の開催に当たっては、日本学術振興会Belmont Forum国際共同研究「気候予測可能性と地域間連関」採択課題「季節～10年規模の地域間連関が気候予測の改善へ向けて持つ潜在的可能性（InterDec）」（代表：中村 尚）から支援を得た。

統合的陸域圏研究連絡会

日時：2018年10月29日（月）（大会初日）17:00~19:00

場所：小会議室5（2F）

テーマ：「気候変動に伴う陸面水循環の変化、及びそれが人間活動へ与える影響」

内容：気候変動が人間活動に及ぼす影響の大半は、陸域水循環の変化（例えば、洪水リスク、河川の季節的な流況パターン、潜在的に最大限利用可能な水資源量の変化）を通じて生じると指摘されている。よって、気候変動予測を人間社会の適応策に繋げるためには、気候変動に伴った陸域水循環変化の予測が欠かせない。さらに、陸域水循環の変化は、陸面の熱水収支を通じて気候変動に対してもフィードバックする。今回の研究会では、新田友子氏（東京大学生産技研）、横島徳太氏（国立環境研）、岡田将誌氏（国立環境研）の3名を話題提供者に招き、気候変動に伴った陸域水循環の変化、およびそれが人間社会に与える影響（主に農業生産や土地利用）についての研究成果をご紹介頂き、このような予測研究の信頼性や利用可能性を高める上で今後の課題について議論する。

問い合わせ先：佐藤 永（海洋研究開発機構）

E-mail: hsato@jamstec.go.jp

極域・寒冷域研究連絡会

日時：2018年10月29日（月）（大会初日）17:00~19:00

場所：中会議室 白櫃2（3F）

テーマ：「北極海の海水減少の中緯度気候への影響は本当か？」

内容：2000年代以降、急激な北極海の海水減少が観測されています。この海水減少が北極域のみならず、中緯度の気候にも影響を与える可能性が指摘されています。海水減少と時を同じくして観測されている冬季のユーラシア大陸の気温低下傾向も、この海水減少が原因であるとする主張が、経年変動に見られる統計的関係や大気循環モデル実験に基づきなされています。しかし、ユーラシア大陸の気温低下傾向は大気の内外部変動（つまり偶然）によるものであり海水減少は原因ではない、という主張も最近されるようになってきました。後者の主張は、少なくとも彼らのモデル実験では、海水減少への気温応答がユーラシア大陸上で得られないことに基づいています。今回の研究会では本研究課題に取り組んでいるお二方に講演いただき、これら相反する主張について考える機会としたいと思います。学会参加者からの話題提供も歓迎しますので、ご希望の方は下記連絡担当者またはお近くの当研究連絡会の世話人にお声掛けください。

プログラム：

1. 趣旨説明
2. 「海水—北極振動連関における成層圏過程・陸面過程・不確実性」 中村 哲（北海道大学）
3. 「北極海氷変動に対する大気応答の同定と定量化」 森 正人（東京大学先端科学技術研究センター）

問い合わせ先：西井和晃（三重大学大学院生物資源学研究所）

E-mail: nishii@bio.mie-u.ac.jp

オゾン研究連絡会

日時：2018年10月29日（月）（大会初日）17:00~19:00

場所：小会議室7（3F）

テーマ：「オゾンに関する観測的研究の将来展望」

内容：今年2月に気象庁のオゾン観測の再編が行われ、札幌と那覇のオゾンゾンデ観測が停止された。この停止は極めて残念ではあるが、この機会に、これまでの観測がもたらした、成層圏・対流圏におけるオゾンに関する科学的知見をあらためてふりかえり、将来へ向けた議論を行いたい。とくに、これまでに蓄積された貴重なデータの活用、実測データのない地点での情報の補完方法、継続されているつくばと昭和基地におけるオゾンゾンデ観測やその他オゾン観測（全量観測、衛星観測等）の有用性などを議論したい。また、データ同化への活用などの数値モデルとの連携

や、官庁とコミュニティが一体となった長期観測の維持の在り方などについても、広く参加者から意見をいただき、共に考えてみたい。

プログラム：（全体で90～120分の予定）

「日本のオゾン観測について」

林田佐智子（奈良女子大学）

「気象庁のオゾン観測・解析に関する取り組み」

竹内綾子（気象庁）

「オゾンゾンデ観測に関する世界的動向」

藤原正智（北海道大学）

「ディスカッションとまとめ」 司会 林田佐智子

問い合わせ先：林田佐智子（奈良女子大学）

E-mail: shayashida@cc.nara-wu.ac.jp

第4回気象学史研究会

日時：2018年10月31日（水）（大会第3日）18:00~20:00

場所：小会議室1（1F）

テーマ：「わが国における大気放射学の草創と東北大学」

内容：わが国における大気放射学は、第二次世界大戦終戦の1945年に東北帝国大学（1947年から東北大学）理学部教授に就任した山本義一（1909~1980）によって草創され、山本とその後継者たちによって世界的水準の研究に到達しました。学生時代から長きにわたって山本と研究を続け、わが国の大気放射学の研究発展を担ってこられた田中氏に、山本の創始した大気放射学の大気物理学における重要性、その後の発展について貴重な報告をいただきます。

また、第二次世界大戦後の早い時期における日本の科学研究活動の再構築という観点から当時の東北大学の特に理学部における動向について加藤氏からご紹介いただき、戦後わが国における大気物理学の発展過程について考察を深めたいと思います。

本会合は気象学史研究に関心を持つ、より多くの方の間の情報・意見交換をうながすため、学会員以外の方にも広く参加を呼びかけて開催いたします。

プログラム：

「わが国における大気放射学の草創」 田中正之（東北大学名誉教授）

「第二次世界大戦時・戦後の東北大学と科学研究動向 ～理学部の動向を中心に～」 加藤 諭（東北大学史料館）

問い合わせ先：山本 哲（気象研究所）

※メールでのお問い合わせは日本気象学会気象学史研究連絡会ウェブサイトの問い合わせフォームをご利用ください。

<https://sites.google.com/site/meteorolhistoryjp/>

リクルートブースの設置について

ポスター発表が行われる場所に隣接して、会場内にリクルートブースを設ける予定です。これは、民間企業から適職に出会うための機会を提供して頂き、気象学会に所

属する大学院生や有期雇用研究者との間での情報交換を通じて、彼らのキャリア形成をサポートすることが目的です。参加予約手続きは不要です。ブースでは、ポス

ター発表時間および昼休みをコアタイムとして、企業担当者が対応します。リクルートブースに出展予定の企業は以下の通りです（2018年8月21日現在）。

日本気象株式会社（10月31日（水）開設）
株式会社気象工学研究所（11月1日（木）開設）
気象情報通信株式会社（11月1日（木）開設）

一般財団法人日本気象協会（10月31日（水）開設）

2019 年度春季大会の予告

2019 年度春季大会は、2019 年 5 月 15 日（水）～5 月 18 日（土）に国立オリンピック記念青少年総合センターで開催される予定です。大会告示は「天気」12月号に掲載予定です。なお、春季大会の講演申し込み締め切りは2019年2月頃となる予定です。